



27. ベニザケ(ヒメマス) *Oncorhynchus nerka* (Walbaum) 図版10

英名 sockeye salmon, red salmon, kokanee (湖沼型\*)

露名 ネールカ クラスナヤ  
нерка, красная

地方名(北海道) ベニマス、ベニ、アカザケ(以上、降海型\*)、チップ、カバチェッポ(以上、陸封型\*)

漢字 べにぎけ ひめます  
紅鮭 姫鱒

アイヌ語名 カパルチェブ、カパツチェブ(以上、陸封型)

【形態】 海洋生活期のベニザケは尾柄\*が細く、サケ属\*魚類のなかでは最も細長い体形である。歯は非常に小さい。体の背部は暗い黒青色、体側は銀白色、腹部は白色。背部および背びれ、尾びれにはカラフトマスやマスノスケのような明瞭な黒点はなく、尾びれの銀色の光沢は弱い。舌の色素沈着はない。ベニザケの陸封型\*のヒメマスは、体の背部が青緑色、体側から腹部が銀白色。背部と尾びれに黒点があるものもある。

産卵期には、ベニザケの雄は吻\*が伸びてかぎ状になり、両あごの歯が発達する。背びれから前方の体背部が著しく盛り上がり、背部が強く側扁\*する。これに対し、産卵期の雌は吻がわずかに伸びる程度である。体色は頭部が黄色みを帯びた緑色あるいは緑色、体の背部から体側は鮮やかな紅色に変わり、体側から腹部にかけては暗赤色から灰色がかった黒色となる。産卵期の体色の変化は雌よりも雄で顕著。産卵期のヒメマスの体形や体色もベニザケと同様に变化するが、体色は鮮やかさを欠くものも多い。

ベニザケで尾叉長<sup>びさ</sup>\*60cm、ヒメマスで尾叉長40cmほどになる。

**【生態】** ベニザケの分布範囲は広く、北緯40度以北の太平洋北部、ベーリング海、オホーツク海を回遊\*する。産卵のため遡上\*する川がある主な地域は、北米側ではカナダのブリティッシュ・コロンビア州のフレーザー川からアラスカのプリストル湾にかけて、アジア側ではカムチャツカ半島。択捉島が遡上河川のアジア側の南限で、日本には天然のベニザケは遡上しない。

ベニザケは、サケ属のなかで最も多様な生活史を示す。特徴的なのは幼魚\*期に湖で生活することである。生後1～3年間を湖で過ごし、尾叉長8～12cmのスモルト\*となって春に海に下りる。淡水で生活する年数やスモルトのサイズは個体群\*によってさまざまである。このほかに川で浮上\*した年の春に降海\*する個体群もある。

降海後1～4年、通常は2～3年を北太平洋で過ごす。北米側とアジア側由来のベニザケは時期的に互いが混じる海域もあるが、それぞれが独自の回遊経路を持つ。オキアミ類\*、カイアシ類\*などの動物プランクトンを餌に、降海後1年で尾叉長40cm弱、2年で50cm前後、3年で55cm以上になる。

性成熟\*が始まった魚は5月以降に母川\*に遡上するが、その時期は個体群によって異なる。産卵期は7月後半から翌1月までで、盛期は晩夏から秋。雌1尾の産卵数\*は2,200～4,300粒。

ベニザケが基本的に遡河回遊型\*の生活史を持つのに対して、その陸封型のヒメマスは一生を湖で過ごす。日本における原産\*地は、北海道東部の阿寒湖とチミケップ湖である。これらは洪積世\*の氷期\*に北海道の数河川に遡上していたベニザケが、淡水域だけで生活するようになったものと考えられている。

ヒメマスは、現在までに支笏湖をはじめとして各地の湖に移殖\*され、洞爺湖、倶多楽湖、摩周湖のほか、本州では十和田湖、中禅寺湖などに定着している。ただこれらの移殖には、択捉島からのベニザケ卵も含まれていたことから、日本固有のヒメマス個体群は消失したと考えられている。



産卵期のヒメマス雄(上)と雌(下)(養殖魚)

ヒメマスは湖内を群れで回遊し、動物プランクトンを長い鰓耙<sup>さいは</sup>\*でこしとって食べる。3～4年で尾叉長20～40cmとなり性成熟を迎える。産卵期は10～11月である。湧水<sup>ゆうすい</sup>のある湖岸の浅みまたは湖に流入する河川で1,000粒弱の卵を産む。ベニザケ、ヒメマスともに産卵を終えると、その生涯を閉じる。